

海親

正宗白鳥

私は不幸にして子供一人のせも有つておな  
いが、私の両親は私を頭子、十人の子を生ん  
だ。そのうち二人だけは早く死んだが、あ  
との八人はまだ生存してゐる。

私とは二つ子がひの二郡の生れた時のこと  
はよく覚えておないが、三郡や四郡や五郡が  
生れた時のことは、今もなほ私の記憶に残つ  
てゐる。いつも安産であつた。

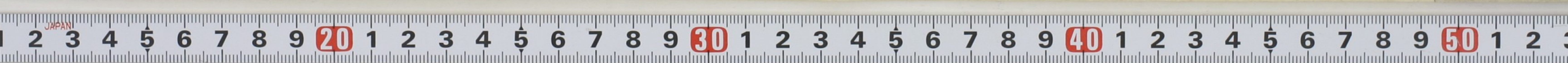
三郡出生の時私は五歳で、すでに小学校  
校へ通つてゐた。産室を覗かされた。祖母  
が戒められて外へ遊びに行かされたが、私は  
隣家へ行つて、一大事件として報告した。  
赤っ子は頭から先へ出るんかやうか、足  
が先へ出るんかやうかと、私は訊ねて隣の方  
家の人子笑はれた。

四郡が生れた時は、母方の祖母が来入  
り、私を子供心で母の産室を氣遣つて、音

東京 文房堂製

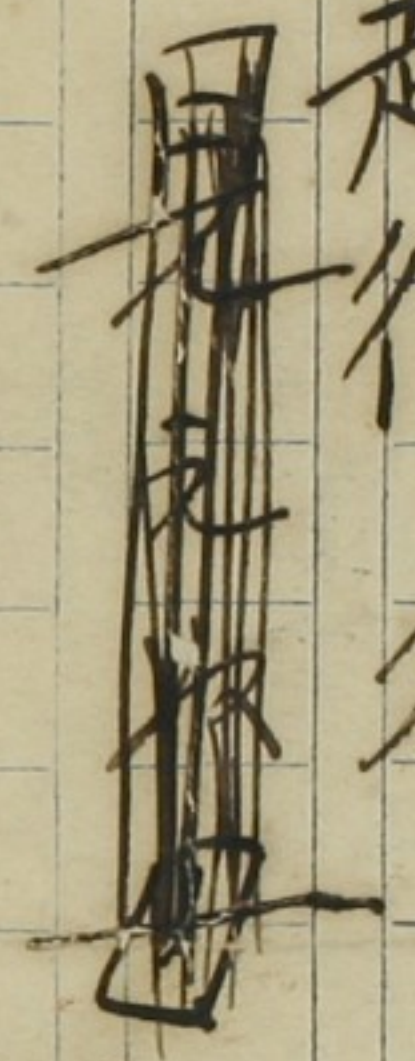
新潮白鳥

新潮新聞



小説新報

越後の冬



小川未明

川舎は山の上にあつた。幾年か西風が打た  
 小川の壁板には穴が明き、突は壊れ、赤  
 い壁の地膚が露はれ、家根は灰色に、板は  
 朽ち、屢々に逆と掩せ、其上に石が載せられ  
 へあつた。此の山の上は風が當る。雪解の頃  
 に、おるは南の風が強いし、冬は沖から吹く風  
 が時々川舎を持つて行くやうに揺るがであつ

た。だが家の周囲には四方から杉や、松や、  
 榎の材を支へて置く。其の木やうもはや  
 大分根元が腐つて、少しの風でぐらつくので  
 あつた。

もはや田や圃の收穫は溜んで、大吉の父親  
 は、病身の妻と其の子と置して、上州へ出る程に  
 出たのである。来年、此の北國の山や野が若  
 く、し、緑の被はれ、早咲の山櫻の花が散つ  
 て、遠野に白い畑が棚成り、桃の花が咲く時  
 分に、おらおけは帰つて来よう。

十ノ廿 新報山田歌

小 山 内 用 箋

次 3

は 病 身 の 妻 と 其 の 子 と 置 し て、 上 州 へ 出 稼 に  
 出 立 の じ あり。 来 年、 此 の 北 國 の 山 や 野 が 若  
 く し ハ 緑 び 袂 は 北 へ、 早 咲 の 山 櫻 の 花 が 散 っ  
 て、 遠 野 に 白 い 烟 が 柳 皮 へ、 枇 杷 の 花 が 咲 く 時  
 分 光 には ち ら ち ら け ち れ ば 帰 っ て 来 ぬ べ

十ノ廿 新築山田歌

を 一 箸 も つ け て 赤 い。 起 きて 飲  
 日 さ 下、 西 田 先 生、 起 きて 飲  
 日 さ 下、 起 きて 平 清 へ 飲 み 直 し に行 き ませ  
 り。 さ 下、 さ 下。 飲 み 直 し、 宜 し い。 平 清  
 日 さ 下、 結 構 だ ぬ。 日 車 も 甚 だ 連 れ て 来 ませ ぬ。  
 日 さ 下、 好 い。 集 ら ず、 集 ら ず。 置

大巻

4

産 の 呂 手 花 虫 で、 長 く 垂 の 鉢  
 置 いた り、 執 帯  
 長 い 縁 側 一 歩 い に 赤 詰 め た。  
 藤 蔭 を 費 ぐ べ ぬ

9

え水かゝり日本橋の方に行つて 藤蔭を貫くおめ  
 え水も長い縁側一歩いにあ詰めた。  
 いろいろお冬おの花卉を 置いたり、  
 産の百子花もで長く垂の鉢 ねた物あつた天  
 井かゝり吊こたり、葉を <sup>や花</sup> した。 間葉お温  
 のこし、こスヤー <sup>い</sup> 通はず <sup>術</sup> とこ  
 あいが、天は、真ん中平等に貧家の軒に、  
 こかけ、スヤー、おしとも幸いに <sup>昔</sup> 花弁を温めて  
 くれた。中より、暮に白木屋に買 <sup>温</sup> った寒  
 本代は枝 昨年の 振り、<sup>紅</sup> 白のり交せ  
~~た~~ <sup>花</sup> 枝の 瑞枝の。朱唇白蕾が、早い  
 三つ四つ開いてきた。厳寒、<sup>最</sup> 中の、時より  
 め青苔 <sup>が</sup> 端、かに鉢、土を換ふし、<sup>の</sup> 目も  
 楽まし <sup>ま</sup> じりにすゑる。 <sup>さ</sup> つか <sup>か</sup> 好く、  
 葉のすいととしてあるの <sup>か</sup> 好く、  
 軒と <sup>ニ</sup> ヤの 懶惰 <sup>よ</sup> 姿 <sup>こ</sup> た <sup>り</sup> 也 <sup>下</sup>  
 りた、<sup>か</sup> 愛 <sup>す</sup> り <sup>足</sup> 下。  
 支那水仙は、去年の <sup>第</sup> 十二月 半、<sup>西</sup> 本樂町の  
 伊留坊の草花屋から買つて来た、<sup>其</sup> 日 <sup>午</sup> 午の脇に  
 載せし <sup>置</sup> いたが、<sup>毎</sup> 日の <sup>最</sup> 中 <sup>に</sup> 寒 <sup>と</sup> 症 <sup>中</sup>



都の秋

哀愁

川路柳紅

秋晴の南の玉の海を街に思ふは

華かなみちの心も鋪石の曇りに沈み入る

渡り鳥のかゝり室の南よ

電線に痛き甚

廣告の繁賑

駭かした群集の中にも一すじの心が沈めば

こぼるる夕ぐれに泣いた木立の

紅見のやうなわいで

涙の悲しさはいつか光りのうちに潜むか

秋晴の南の玉の海を街に思ふは

都の秋

都の秋のうすい淋しさ

鋪石にすく柳の葉を

暮れ方の灯に涙を見れば

四十年増のやうな瞳の心になつかし

カッパに灯がつか

春の歌の凍るれば

春の歌の凍るれば

卓上たくとしやうにのこる燈あかりえた林檎りんごに

かろくさえさナイフの冷ひやたすが

しづかに冷ひやめさ女の心こころ臓しんがいのごとく

さ、やかにに さ、やかに、 訪かたれる柳やなぎの風かぜ

暮しの煙草

どこかさずしい横よこ割わりに

見おほえのあす睡いそみを思おもへば

鼻はなは苗香ななまきのにはほりの如ごとくにはやかに街まちに清きよえ

ゆく。

頼たのましり月の出いを待まちた

都みやこ屋やの屋根やぐらにみり悲かなしき。

都<sup>ト</sup>字<sup>ジ</sup>の<sup>ノ</sup>屋<sup>ヤ</sup>根<sup>ネ</sup>に<sup>ニ</sup>み<sup>ミ</sup>了<sup>リ</sup>悲<sup>ヒ</sup>し<sup>シ</sup>き<sup>キ</sup>。



原稿断片

白鳥未明  
實篤柳虹  
董秋江



本間文庫

文庫 14

A186

